

Vision

Design

Vision

Don't just be smart, go beyond smart.

Design

本書は、日立のビジョンデザイン活動を紹介するものです。

ビジョンデザインは、日立が社会イノベーション事業を掲げたのを受けて、2010年、当時のデザイン本部の「新しい社会システムのビジョンを描くのはデザインの役割である」という思いから始まりました。問題設定とその解決に臨む創造的な態度——デザイン思考の実践や、サービスデザインの方法論を日立グループやパートナーの方々に広めていく活動を通じて、さまざまなエンジニアリング領域の研究所と融合し、2015年、社会イノベーション協創センターが誕生しました。

そして、2016年に日本の内閣府が発表したSociety 5.0のコンセプトのもつ本質に共感するとともに、技術が人をリードするのではなく、より地域やそこに暮らす人びとにフォーカスした社会システムのあり方を示す必要があると私たちは考えました。この考えに基づき、目的を再設定して立ち上げたのが、現在のビジョンデザイン活動です。

本書では、多岐にわたるビジョンデザイン活動の大きな枠組みを捉えるとともに、いくつかのプロジェクトを紹介することで、この活動の多様性と可能性をお伝えします。本書が、ビジョンデザイン活動への理解と、より創造的な議論へとつながっていく契機のひとつとなることを願います。

株式会社 日立製作所 研究開発グループ
東京社会イノベーション協創センター
ビジョンデザインプロジェクト

Contents

- 3 ————— はじめに
- 4 ————— ビジョンデザインとは
- 10 ————— きざしを捉える
- 12 ————— [未来を語る] Crisis 5.0
- 14 ————— 街・ホーム
- 16 ————— 信頼のかたち
- 20 ————— [未来を語る] 架空の記事
- 24 ————— フューチャー・リビング・ラボ
- 26 ————— あとがき
- 27 ————— ビジョンデザイン 活動歴・関連情報

Vision

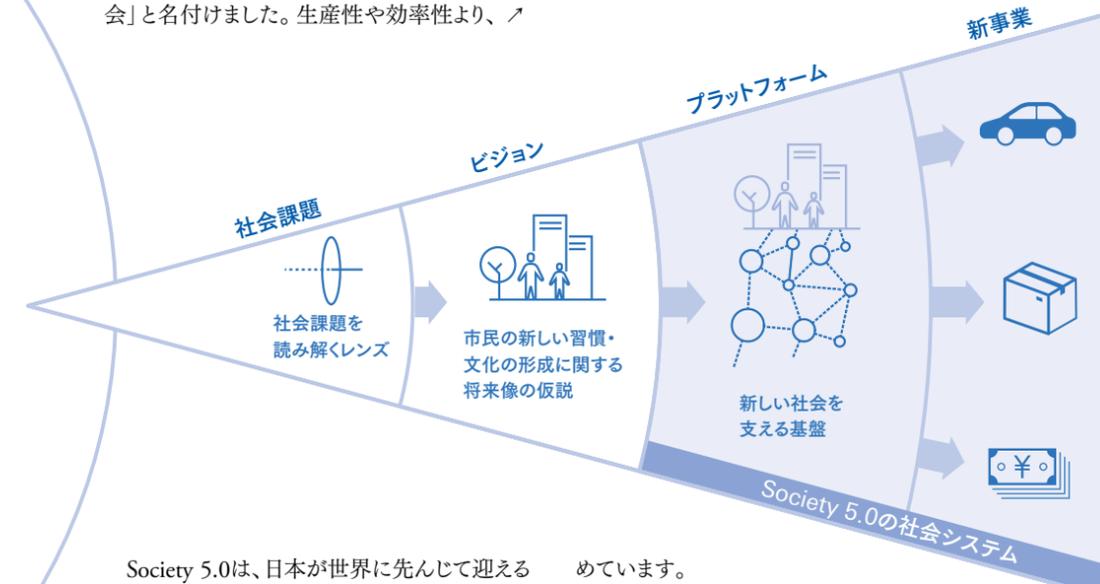
ビジョンデザインとは

社会で起こるさまざまな現象を独自の視点で読み解き、仮説を示して議論をすることで社会システムを生み出す。この社会システムに新しい時代の価値を見出していくことが、ビジョンデザインの役割です。

Design

社会現象

- 少子化
- 温暖化
- 高齢化
- 富の一極集中
- ……



いま、日立は Society 5.0の実現に挑戦しています。日本は、国連で採択された持続可能な開発目標(SDGs)に加えて、Society 5.0という新しい社会コンセプトを掲げています。

Society 5.0は、現在の Society 4.0からパラダイムが変わることを示唆する言葉です。2018年には経団連が Society 5.0を「創造社会」と名付けました。生産性や効率性より、ノ

人びとの創造性を高めることが大切にされる社会という意味です。Society 3.0の工業社会から4.0の情報社会に変わったとき、その新しいプラットフォームは Windows やインターネット、スマートフォンなどのIT基盤でしたが、Society 5.0では、それらとは異なるものが新しいプラットフォームとして社会を支えることとなります。

Society 5.0は、日本が世界に先んじて迎えるさまざまな問題に対して、デジタル技術を活用して豊かな社会を築こうとする活動といえます。本格的な人口減少時代においては、大規模な基幹インフラを縮小させ、小規模で柔軟なインフラの割合を増やす必要があるともいわれています。

私たちは、この小規模で柔軟なインフラは、基幹インフラを単純に小さくしたものではないと考えています。基幹インフラが、不変で安定した基盤をつくった上で、広域でより多くの人に使ってもらおうというアプローチを採っていたのに対し、小規模インフラは、地域住民の皆さんがそれを使いこなせるような新しい習慣をつくった上で、それに必要な基盤をつくっていくようなアプローチをとるものだと考えているのです。ビジョンデザインは、このような社会における新しい社会システムの姿を描く活動です。

しかし、これからの社会システムの姿について考えることは、日立のようなひとつの会社が答えを出せるほどシンプルなものではありません。そこでビジョンデザインでは、問題提起と答えの例を「ビジョン」として示すことで、望ましい社会システムに関する議論を起すことから始

めています。

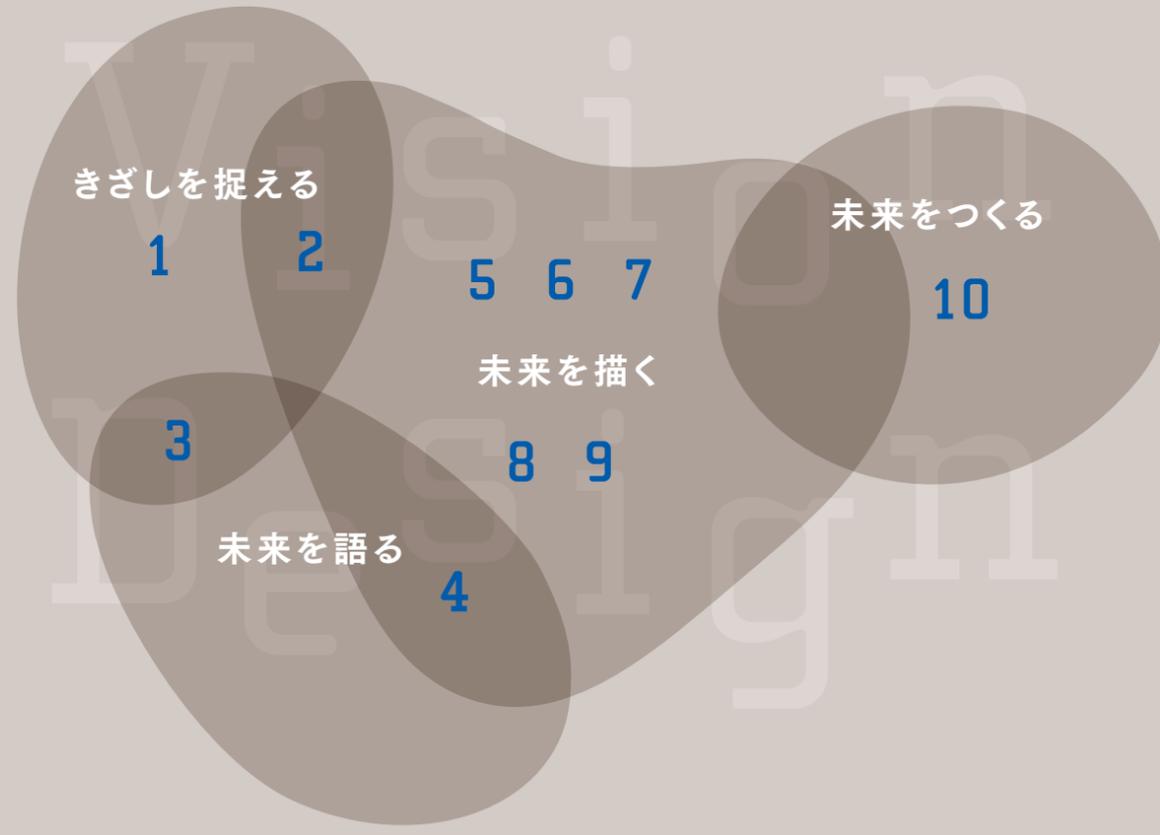
ビジョンを描くときに私たちが意識しているのは、そのビジョンが Society 5.0における新しい習慣や文化の形成を支えるものになっているかということです。小規模で柔軟なインフラ、つまり地域の系を回すのは住民ひとりひとりの行動です。Society 5.0に関する話の中では技術やデータが取り上げられることが多くありますが、そもそもそれらを活用する習慣がなければ、住民は技術やデータを使うことができません。地域で、住民が活動の可能性を広げようとしたとき、技術やデータがどのように使われうるかということが、ビジョンを用いた議論の重要な論点なのです。

そこで私たちは、ビジョンデザインのコンセプトを「Don't just be smart, go beyond smart.」としました。スマートな先進技術だけでは解決できない生活者の切実な問題や、スマートな先進技術が人びともたらしてしまうかもしれない新たな問題について示し、人間だけではできない、技術ならではの人への寄り添い方を考えるという意味です。Society 5.0は super smart societyではなく、beyond smart society であろうというのが、私たちの考えです。

[これまでの主なビジョンデザイン活動]

1 25のきざし / デジタル社会のきざし

社会に暮らす人びとの考え方や行動がどのように変わりうるのかを示し、将来の社会課題を生活者の視点で考えることを促す



2 TRUST / 2030

未来の信頼のかたち

2030年の日用品をつくることで、未来の「信頼のかたち」を思索する

ID for gig economy

個人同士が仕事に関する実績や評価などのデータを組み合わせて、情報の交換をすることで信頼を築く

Your reliable city

少しずつ価値を実感しながら、やがて多くの大切なデータを街へ託していく

Cycle of change

小さなおつりを分け合うことで育まれるコミュニティ内の信頼を、地域活性の力に変える

3 Crisis 5.0

人がもつ根源的な「不安」に着目し、立ち向かうべき危機を直視する

4 エネルギー

Energize our future communities

街への思いをエネルギーに関する行動につなげ、少しずつ街をマイクログリッドへ変えていく

5 街・ホーム

Ageing with me

コミュニケーションロボットが高齢者の発話を促し、生活をサポートする

More household items within reach

家のモノのカタログ化、シェアにより身軽な暮らしを実現する

My meal pass to go!

IDカードとミールプリンターが普及した社会で、食事制限があっても、外出先で楽しい食事の時間を過ごせる

Home appliances to ward off colds

街中の家電によって可視化されたウイルスの広がりを見て、風邪の流行を回避するために市民が動き出す

6 街づくり

Morphing into a walkable city

駅前のロータリーを人が主役のスペースに変えて、街を歩く楽しみと人びとの新しい活動を生み出す

Fare fund

鉄道運賃の一部を地域のために使うことで、来訪者と地域住民の持続的な関係を構築する

7 ペイメント

Communication through dynamic pricing

みんなが毎日くり返す「買う」を社会にとって良いことと結びつける

8 ものづくり

Factories on demand

消費側によるものづくりによって生み出したモノを大量生産品と同じように流通させる

9 自動運転

自動運転車いす

歩くようになってくる自動運転車いすは、外出の勇気を与え、歩くことの楽しみに気づいてもらう

10 フューチャー・リビング・ラボ

わたしの野菜 東京都国分寺市

農畜産物の地産地消をとおして、市民が自ら作り出す新しいコミュニティづくりに挑戦する

Hi Miura Project 神奈川県三浦市

地域で活動する人々の「思い」を地域で共有し、未来にむけた活動の仲間を増やしていく



STATION

KOBAN

OFFICE OFFICE

ELEMENTARY SCHOOL

DRUG STORE

本日特売
しよる
うか

八百屋

今日特売
ゆづ

YOGURT



Future signs

きざしを捉える

起こるかもしれないオルタナティブな未来を考えるために
人びとの考え方や行動の変化のきざしを捉えます

過去のデータの分析から、未来を正確に予測して答えを出すことはできません。ここで示すのは、未来の社会において人びとがどのような問題を抱え、どのようなニーズをもっているのかを考えるときの、ビジョンデザインにおける最初の「問い」となるものです。

このきざしが示す「問い」に対する解決案の具体的なシナリオを示すことで、さまざまな対話を促し、議論を活性化させるきっかけとなることをめざします。新しい社会システムを利用する生活者の視点に立脚し、効率化だけでは解決できない等身大の課題を捉え、解決のアイデアを示す活動は、ビジョンデザインの根幹となっています。

25のきざし

少子高齢化や、環境負荷に配慮した持続可能な社会への転換など、さまざまな課題を抱える都市で、人びとの考え方や行動がどのように変化していくかを考えました。環境施策が住民の知見によって見直されたり、家族のかたちがより柔軟になったりする未来を描きます。

考察にあたっては、PEST(政治・経済・社会・技術)の視点で主に文献やWebによるリサーチを行い、2030年までの時間軸とPEST軸を掛け合わせました。自治体や日立の協創パートナーとともに議論を重ねることで、社会イノベーションの構想形成に貢献しようとするものです。



DIY Society

公共なんて探しても見つからない 私たちこそが公共

流通や産地への不信感を背景にした家庭菜園の増加など、安心を自分でつくりだす「生活環境のDIY」のきざしが見て取れます。自分の価値観に合わせた商品のカスタマイズや資産運用サービスの選択肢が広がり、インフラや年金などの社会サー

ビスも民間のアイデアが取り込まれるといった流れが予想できます。そうなれば、多様な生活者の価値観に合うさまざまな行政基盤をもつ街が日本の各地域に現れるでしょう。



デジタル社会のきざし

インフラ、金融、医療など社会生活を支える分野にデジタル技術を活用したサービスが広がっています。ネットワークにつながったセンサ、AI、ロボットなどが社会のいたるところに入り込み、人とモノのつながりに変化が生まれることで、人びとの考え方や行動が大きな影響を受けることになるかもしれません。

デジタル社会のきざしは、そこで暮らす人びとの考え方や行動がどのように変わりうるかを示したものです。これを通じた議論によって、将来の社会課題を生活者の視点で考えることを促します。

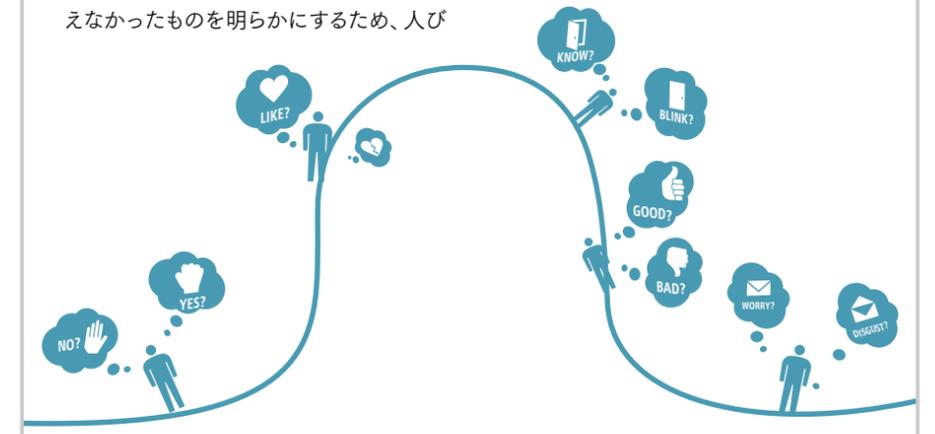


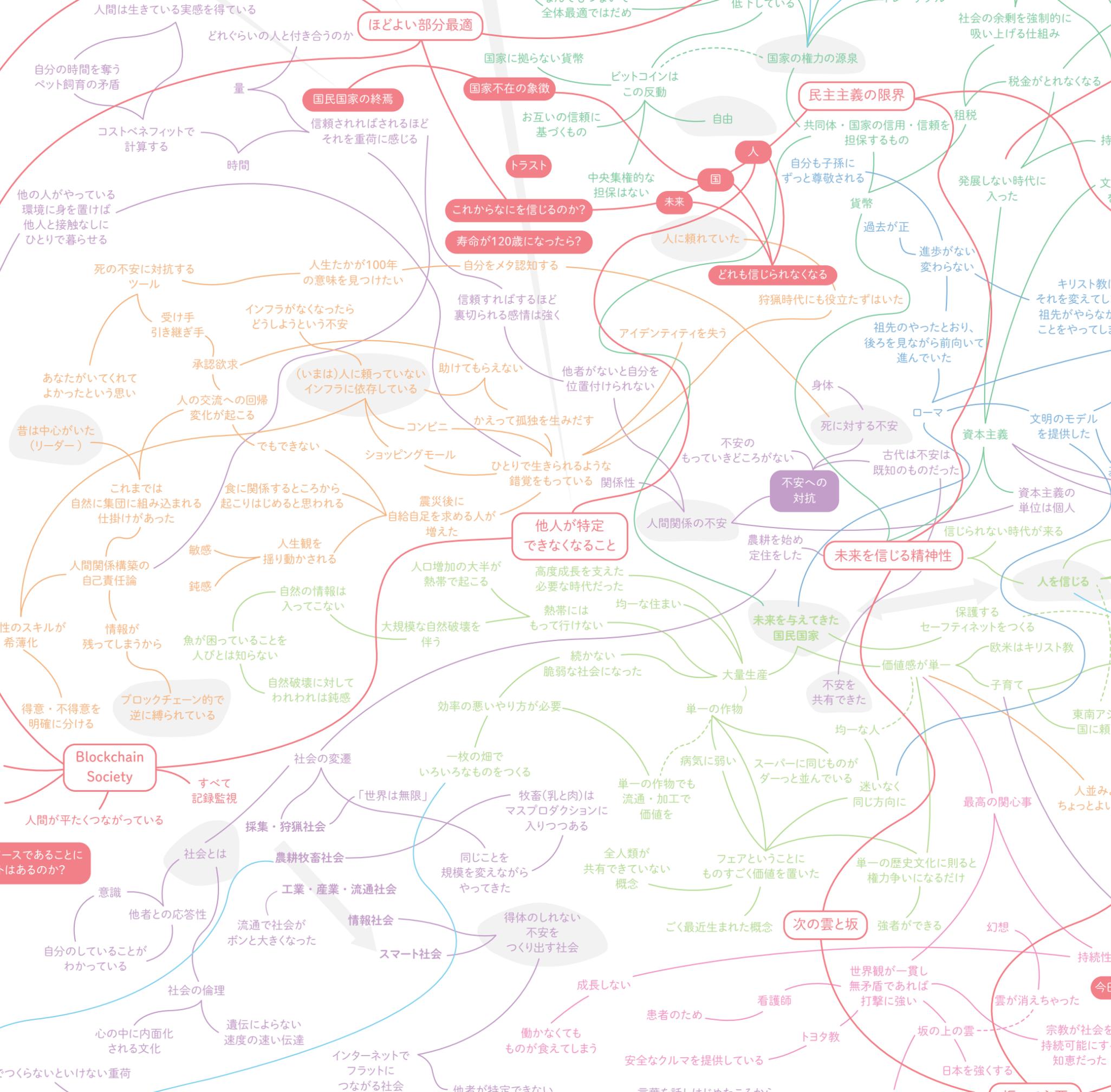
No policy, no life

生きることは態度表明の連続

いまやスポーツ選手のパフォーマンスもデータ化され、客観的に解析されています。観客は選手の高いパフォーマンスに歓喜する一方で、選手自身も自覚していなかった弱点を攻められる様子に落胆することもあるでしょう。データ解析は、これまで見えなかったものを明らかにするため、人び

との生活を豊かにする反面、不都合な事実を突きつけもします。それを「仕方ない」と受け入れるか、「許せない」と反発するか。私たちはこのような意思決定を繰り返して、データとのつきあい方をかたちづくっていくことになるでしょう。





[未来を語る]



Crisis 5.0

2050年の社会課題の探索

京都大学と日立の共同研究テーマ「2050年の大学と企業のあり方」の一環として、将来起こりうる社会現象のうち、人間にとって根源的に大切なものを脅かす大きな変化とは何かを探索しました。

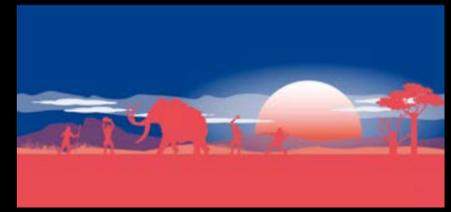
社会課題というと、高齢化、少子化、過疎化といった言葉がよく取り上げられますが、これらはあくまで「現象」であるという前提のもと、こうした現象によって、人間にとって大切なもの—生命、財産、人権、アイデンティティなどが脅威にさらされることこそが、社会課題だと考えました。

この考察を深め、人間社会の本質を捉えるために、京都大学のさまざまな専門分野の研究者にインタビューを行いました。いまの社会のありようや、その変化と原因の聞き取りを通じて得た知見を通じ、2050年の社会課題についての考察を「Crisis 5.0」というかたちにまとめました。

古来、人間社会の発展は、未来を信じ、そこに生まれる不安を克服することで推進されてきたという観点に立脚。現代の加速度的な技術の進歩と、人間の生来の精神性や感覚との間に生じているギャップを、「信じるものがなくなる」「頼るものがなくなる」「やるこたがなくなる」という3つの喪失として考察しています。

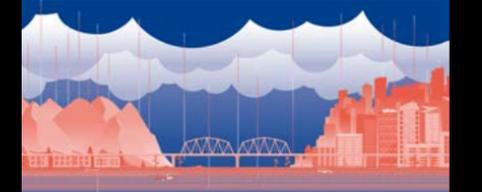
信じるものがなくなる

未来を信じて投資を行うことで、人類の文明は発達してきました。ところが、物質的な豊かさを求めて成長を重ねてきた結果、環境問題をはじめさまざまな問題が生まれ、持続可能な社会への転換が求められています。無垢に未来を信じるのが困難な時代に、人間はなにを信じることができるのでしょうか。



頼るものがなくなる

先進国では特に、高度な文明の上に築かれた国家が、これまで人間の生命や財産を守ってきました。ところが高度成長を遂げた日本では成長にかけりが見え、国力も下がっていかなかで国家に頼り切ることが難しくなっています。社会を維持し、人びとの生活を守るために、どのような社会サービスやコミュニティが考えられるでしょうか。



やるこたがなくなる

これまで人間が担ってきた役割をAIやロボットが担うことで、自動化・効率化は今後ますます進化していく様相ですが、労働の必然性を欠いた状態で人間は生きる意味やアイデンティティをどのように見出すことができるのでしょうか。



この3つの喪失を、どうすれば人間社会が乗り越えていけるのか、Crisis 5.0は問いかけています。

本テーマのもと、2018年には京都大学の学生と「Challenge 5.0」と題したワークショップを行い、未来の行動につなげるための対話と議論を深めました。



Illustrating our vision of the future that goes

街・ホーム

未来の都市で起こる現象は、私たちの生活や考え方にどんな変化をもたらすか——
新しい課題を捉え、その解決のためのアイデアをビジョンとして描きます

これから迎える少子高齢化や都市への人口集中といった現象が、人びとの生活にどのような影響を与え、どのような課題をもたらすのでしょうか。

都市生活者の視点から、街や家(ホーム)において今後生じるかもしれないふたつの方向性—「人やモノの活発な移動とシェアリング」「不安の質の変化」を導き出し、それらによってもたらされるであろう課題と、解決のためのアイデアをビジョンとして描いています。

beyond smart

Beyond sharing in 2025 人やモノが動き入れ替わる 持たないことの幸せ

「都市への人口集中」「核家族化・ひとり世帯」「リソース枯渇」といった社会課題の解決の糸口として、現在もさまざまな分野で広がりを見せているシェアリングサービスや、コミュニティとの共生の新たな可能性を探っています。



More household items within reach

郊外に家を買って30年、子どもも独立し二人暮らしとなった夫婦は、生活に便利な駅近に移りたいと思っています。ところが家中の多くのモノの処分の大変さを考えると動けません。そこに、ルームカメラのついた電球を設置することで、生活に変化が訪れます。

モノが雑然と多いためよく探し物で苦労していましたが、モノの位置を記憶したルームカメラが教えてくれるようになります。モノをカタログのように一覧で確認できるようになるため、整理や片付けが楽しくなってきます。シェアサービスやトランクルームを手元のタブレット端末で発注できるため、気軽

に利用するようになります。こうして少しずつ、以前は動かせなかった利用頻度の低いモノが減っていき、家がすっきりと広くなり、夫婦は身軽になっていきます。

やがて彼らは駅に近いマンションに引越し、元の家を別の家族に貸し出すことに。こうした住み替えの循環が、街全体に広がっていきます。



Beyond safety in 2025 消せない不安から 人びとを守る社会

データ解析や情報の精度が上がるために「知りすぎてしまう」「知られすぎてしまう」ことで生じる、従来とは異なる不安は、どのように和らげることができるでしょうか。AIやデータを人に寄り添うかたちで活用し、人びとが安心して暮らすことのできる技術のあり方の可能性を探ります。



Ageing with me

高齢者が将来に漠然と不安を抱えながらひとり暮らしをしていると、コミュニケーションロボットが家にやってきます。表情豊かでおしゃべりなロボットは、高齢者に自分から話しかけたり、彼／彼女が欲しいものを聞いて注文してくれたりします。高齢者はロボットと純粋に会話を楽しむこともで

きますし、服薬の時間を教えてもらうなど生活のサポートも受けられます。会話を重ねることでロボットは高齢者の行動パターンを把握し、健康状態を外部の家族や医療関係者に伝える役割も果たします。

長年生活を共にしたロボットが、もし高齢者のわずかな行動変化を察知した場



合は、高齢者が不安を感じないで済むように接しながら、少しずつ役割を変え、たとえば認知機能のトレーニングを気づかぬかたちで行うようになります。高齢者の変化に合わせて役割を自ら変えながら、ロボットは高齢者のパートナーとして、彼／彼女に寄り添い続けます。

TRUST / 2030

信頼のかたち

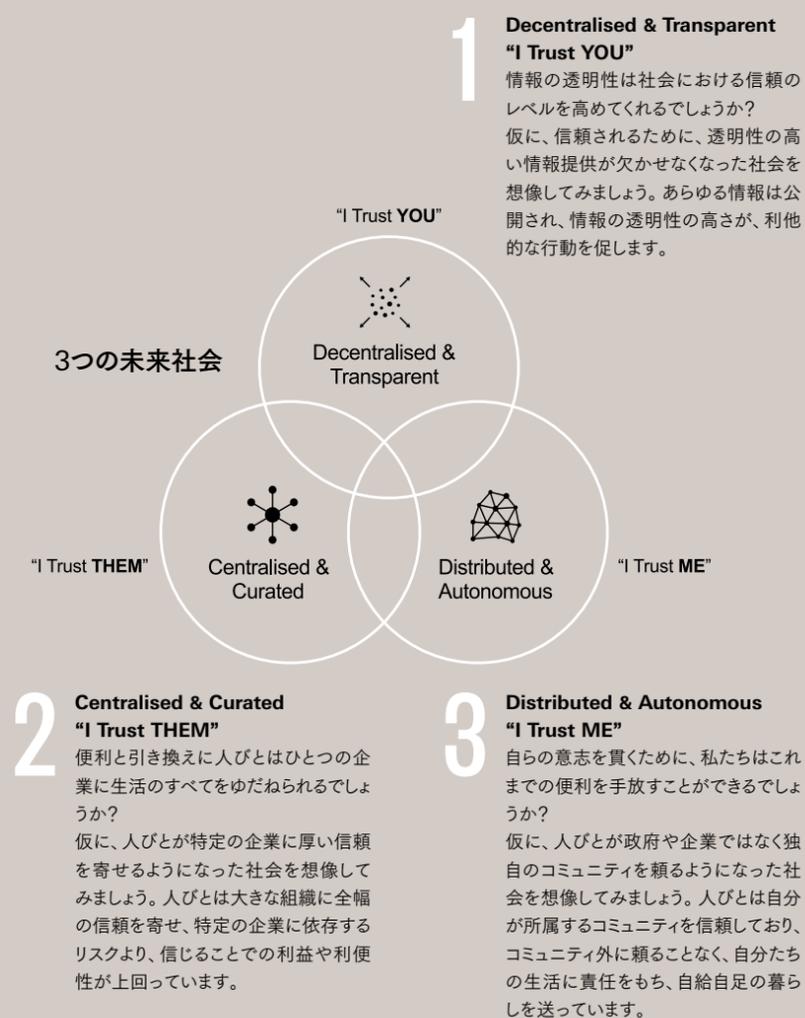
時は2030年。私たちの生活や価値観は、どう変化しているでしょう——
3つの未来社会を設定し、それぞれの社会で育まれる信頼のかたちを考えます

「信頼」は、私たちの社会がうまく機能するために欠かせないものです。

たとえば、経済は金融システムと通貨に対する信頼の上に成り立っており、医療は医学と医師に対する信頼に支えられています。かつて人びとは、お互いに顔見知りというほど小さな村に住み、お互いの行動に説明責任を負う小さな社会を築いていました。次第にその社会は大きくなり、私たちは信頼のよりどころを政府や企業、組合など大きな組織に求めるようになりました。

ところが、インターネットやモバイルデバイスの普及によって、大きな組織を介さなくても個人同士がダイレクトにつながるようになりました。その結果生まれたシェアリングエコノミーは成長し、大きな組織に寄せられていた信頼は分散しつつあります。

私たちは、これからの社会の変化で人びとの生活や価値観がどう変わるのかを考え、2030年頃を想定した3つの社会を描きました。そして、そこで生まれる新しい信頼のかたちを思索しました。



3つの未来社会の日用品から信頼のかたちを想像する

私たちは2030年の日用品のアーティファクトをつくることで、未来の社会を思索することになりました。今の日用品とは少し異なるかたちや機能は、それを扱う2030年の人びとの生活と、そこに現れる新しい「信頼」のさまざまな側面を語りかけます。



1 Decentralised & Transparent — Connected ID card

インターネットを通じて単発のクリエイティブな仕事を受注し、その収入で生計を立てるギグワーカーが増えます。会社に所属しない彼らの身分証明の情報を伝えるのが、このカードです。就業した職種や仕事ぶりなどの情報がカードに蓄積され、その人の経験や能力・専門性などを客観的に示します。

情報の透明性が高い社会では、個人のあらゆるふるまいが記録され、客観的に評価されるようになります。このカード

で自らの情報を他者と共有することで、仕事だけではなく生活のあらゆる面で信頼を得やすくなります。



2 Centralised & Curated — Personalised meal bar

このミールバーはユーザごとにパーソナライズされており、必要とする栄養素がすべて含まれています。企業は収集したユーザの情報のもと必要な栄養素の提供のみではなく、最適な摂取タイミングまで提

示してくれます。しかも味や香り、食感もユーザの好みに合わせてあります。

この社会では、ユーザの「食」への関心が薄くなっています。自分の身体に必要な栄養素を理解する興味や知識もなく、食べることに時間を使いたがりません。できれば企業に管理してもらいたいというのが願いです。ユーザは、このミールバーによって「今晚、何を食べよう」「この栄養バランスは？」などと考えるわずらわしさから解放されます。



3 Distributed & Autonomous — Locally printed medicine

この社会では、人びとは大手製薬会社を信じられなくなり、薬はコミュニティ内でつくられるものが一般的になります。

地域で認定された薬剤師による薬が出回ります。3Dプリンタで製造され、形は目新しさを感じさせますが、それがまたこの地域でつくられたという信頼と安心の形として認められます。

大企業や大きな組織に対する信頼は大幅に下がり、個人や小さなコミュニティがその空白を埋めるようになります。薬の

材料の原産地や、生産者との個人的な信頼関係が、つくられた薬への信頼度をさらに高めるのです。



3つの未来社会の生活と信頼を生むための仕組みを考える

未来の社会では、データやデジタル技術の活用がさまざまなかたちで生活に浸透しますが、人びとが安心して日々を過ごせるように育まれる信頼もまた、ここに描いた3つの社会それぞれのかたちをもつことになるでしょう。



1 Decentralised & Transparent Communicating trust with transparency / ID for gig economy 個人同士が細かい実績データを組み合わせて信頼をやりとりする

この社会では、企業に所属せず、たとえば「配達も行うギフトコンシェルジュ」といった、クリエイティブな仕事を自分で見つけながら働く「ギグワーカー」が多く働いています。個人間のやりとりで信頼を築く社会では、お互いに過去の実績を確認しあうことが大切にされています。

ID for gig economyは、個人が自らの情報を組み合わせて周囲へ伝え、新し

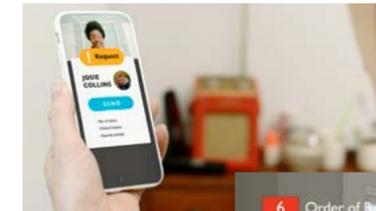
い信頼を築く仕組みです。配達業務での「時間通りに来た」「子どもの誕生日ケーキを配達した」といった細かい行動実績が、ベビーシッターを担う時には「時間を守り、子どもに関わる仕事経験がある」といった情報として、信頼の獲得につながります。

また、依頼主の感謝を評価に活かせる。たとえば「子どもの気持ちがわかる」という言葉が依頼主から送られると、ワー



カーはベビーシッターの仕事を得るための情報として活用することができるのです。さらにこのシステムは、詳しい説明が必要な情報については対話を促します。時にはネガティブな実績も、対話を通じて信頼を得るための情報に変えるのです。

客観的データを個人が自分でコントロールして使いこなしていくことで、1対1の信頼を築くことができるのです。



2 Centralised & Curated Committing trust to the authority / Your reliable city

少しずつ価値を実感しながら、やがて多くの大切なことを街へ託していく

自分の行動データの何が街に提供され、何に活用されるのかを市民が把握できない状態で、街を信頼できるでしょうか。

Your reliable cityは、はじめから市民のデータを大量に取得するのではなく、限られたデータを少しずつ受け取り、その効果をわかりやすい形で還元することで、データ活用を通じた市民との信頼構築を大切にする街です。

はじめに市民は位置センサーを受け取ります。このセンサーを使って、どのようなデータを街へ渡すかは住民がひとつずつ選びます。位置センサーを持ち歩くことで信号や標識が切り替わり、市民は自分の安全を獲得します。センサーのレーザーを置くお店が街に増えると、ちょうどいい時間にバスが走るなど、移動がしだいに便利になっていきます。



こうして市民と街との間の信頼が築かれはじめ、次は街を巡回するロボットが現れます。市民の皆と「知り合い」のロボットは、位置センサーのデータをもとに、市民同士のコミュニケーションを促し、コミュニティが良い状態になるよう働きかけます。

どのようなデータをどのくらいのペースで提供すれば、市民は街という大きな存在に信頼を抱くことができるでしょうか。



3 Distributed & Autonomous Sharing trust in the community / Cycle of change

小さなおつりを分け合うことで育まれるコミュニティの信頼

同じ地域に住む人びとが互いに育む信頼は、豊かな社会生活にとって重要な要素のひとつです。相手の見えないデジタルなショッピングや取引が進む社会で、「地域経済」の価値をどのように支えることができるでしょうか。

Cycle of changeは、市民と商店の間に生まれる「顔の見える」経済の仕組みです。

地域の商店が街を元気にするアイデアを掲げ、賛同した市民が買い物で生じる「おつり」をお店に託します。目標額に達すると、集めたお金を使ってアイデアが実現されます。たとえば商店街の移動を快適にするキックボードが設置されたり、子どもの書籍購入を少し負担してあげたりと、少しずつ街が素敵に変っていくことを目の当たりにします。この変化が市民同士



の会話のきっかけになり、地域での買い物をもっと楽しくなるかもしれません。

地域のいろいろなお店でお釣りを分け合うことがコミュニティで共有されるルールとなり、ルールの共有がやがて信頼を育み、コミュニティならではの個性を築いていく。

これが分散し自立していく社会像における、地域の信頼のかたちです。





架空の記事

Energize our future communities / Power to the startup

ビジョンデザインは、日立による提案活動ではありません。他者との議論を通じて新しい発見をしたり、新たなストーリーが生まれたりすることが、ビジョンの醍醐味です。

もし、社会の変化を捉え、その意味や意義を世に伝えるジャーナリストがビジョンで示された世界を訪れたら、彼らはその姿をどう伝えるでしょうか——。私たちは、ライターの森旭彦さんと共に、ビジョンの世界観取材して伝える「物語的プロトタイプ」によって、オリジナルのビジョンにリアリティを与える試みを行いました。森さんとの取材対象として選んだのは、エネルギーと市民のつきあい方の変化を描いたビジョン「Energize our future communities」です。再生可能エネルギーの利用を高めていくための実証が進められているマイクログリッドに焦点を当て、地域に実装される過程でどのようにすれば無理なくマイクログリッドへ移行することができるか、住民の視点からの課題を示したビジョンです。

住民の自家発電の余剰分を地域の事業者へ提供し、お返しとしてその事業者の製品を受け取るといった1対1の融通が増えていきます。街中の電力融通が活発になり、自然とマイクログリッド化されていくことで、電力をクリーンにしたい思いと、コミュニティを活性化させたい思いの相乗効果を促します。

このEnergize our future communitiesのビジョンを森さんと共有し、話し合いを重ねたのち、森さんがフィクションの雑誌記事「Power to the startup」を生み出しました。森さんはふだん、いろいろな人や場所を取材し、調査を行い、記事を発表しています。それと同じことを、Energize our future communitiesによって描かれた世界の中でおこなってもらいました。

Power to the startupの舞台は、2020年の架

空の都市「日立県第二陽立区」。この街では、移住してきた住民が起業すれば電気代が無料になるという施策により、ブリューリーなどの新事業が生まれています。

この土橋乳業にはもうひとつの顔がある。それは街の発電所だ。牛舎の屋根や牧場の広大な敷地には、ぎっしりと太陽光発電パネルが敷設されている。

「牛と電気は、ぜんぜん違うものなんですけど、どちらも敷地の広さがビジネスのアウトプットに大きく影響するという点では共通しています」

土橋乳業で発電された電力はブリューリー「バーバリアン」でビールの製造のために使われている。そして土橋乳業は、バーバリアンから電気代の代わりにビールを貰い受けるとともに、委託販売業務の独占契約を結んでおり、乳製品の販売で培ったネットワークを使い、国内の主要デパートおよび海外にも発送している。

「Power to the startup」

オリジナルのビジョンでは「どうしたら地域が少しずつマイクログリッドに変わっていくか」という課題が設定され、それが解決された状態が描かれていたのに対し、Power to the startupでは「少しずつマイクログリッドに変わる仕組みに最初に乗るのは誰か?」「そうしたコミュニティはいかにして生まれるのか?」という一歩踏み込んだ課題が設定されました。

こうしてビジョンについて構想者同士が対話をする中で、新たな問題提起につながっていくのです。



Energize our future communities

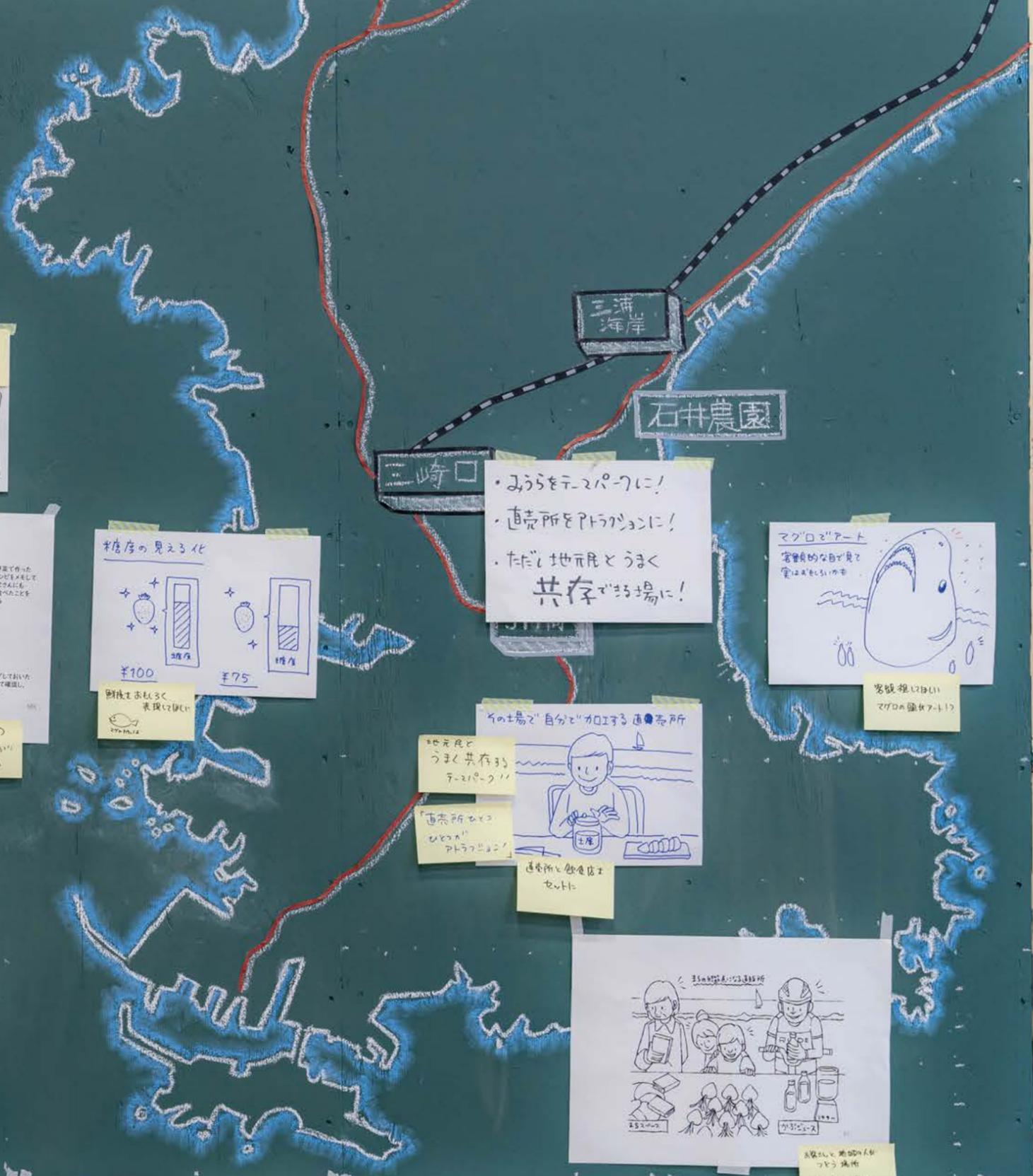


僕がやったことは、日立のビジョンが実現するとすればどんな社会設定が必要か、ということフィクションとしてつくり込む作業でした。このシナリオの受け止め方は本当に人それぞれだと思います。賛成意見もあれば反対意見もあると思います。僕の印象では、大企業というのは、事業をできるだけ多くの賛成意見の総和のもとに成立させようとする。少なくとも、そう振る舞う傾向はある。しかし実際の未来が生まれるプロセスというのは、社会の中で賛成も反対も混在して議論される中で動的に答えがつけられていくことと不可分ののだと思います。そういった動的な議論を生み出していこうとする日立の取り組みは、非常に創造的だと思います。 森旭彦

森旭彦:サイエンス、テクノロジー、アートに関する記事をWIRED日本版、Forbes Japan、MIT Technology Reviewほかに寄稿。理系ライター集団「チーム・パスカル」メンバー

HI MIURA PROJECT

MEET UP



直売所の情報共有

各直売所間の情報共有

みうらをテーマに!
直売所をPRしよう!
地元民とうまく共存できる場に!

マグロアート

客観的にいいマグロの画像アート!

米店が見える化

¥100

¥75

来る前、来た後、繋がる直売所

① 直売所の直売所から、直売所の直売所へ

② 直売所の直売所から、直売所の直売所へ

③ 直売所の直売所から、直売所の直売所へ

その土地で「自分」が活躍する直売所

地元民とうまく共存できる場所

魚羊度の新しい見せ方

マグロの新しい魚羊度の見せ方

ウェブカメラ

石井NOW

¥100

¥50

1 直売所の直売所から、直売所の直売所へ

2 直売所の直売所から、直売所の直売所へ

3 直売所の直売所から、直売所の直売所へ

三浦で買い物、ついでにちょっとの「三浦の応援」

ひとつの手で三浦をめぐって地域を彩るブルーライン

直売所の直売所

直売所の直売所

販売所+休m+ポイントドリンクポイント

三浦線

三浦線

直売所の直売所

直売所の直売所

Future Living Lab

フューチャー・リビング・ラボ

ビジョンを描く活動に加え、現実の生活の中から未来を構想し、社会に変化をもたらすフューチャー・リビング・ラボという活動を始めています

現実の社会でこれから生じてくるであろう課題は、オフィスや実験室で独自に研究や開発を行うだけでは解決できません。日立は、生活の中でさまざまな課題と向き合っている人びとと手を携え、共に考え、イノベーションを共に生み出すことをめざしています。

フューチャー・リビング・ラボという活動は、まず具体的な地域に立って未来を考えるとことから始まります。NPOやNGOなどの市民組織、政府や自治体などの公的組織、また企業や投資機関などの民間組織と手を携えながら、将来向き合うことになる課題を見据え、新しい社会システムを想像し、社会をデザインしていくのです。

そこで直面する課題は、技術だけでは乗り越えることができないかもしれません。人びとが新たな価値観を探りながら、自らの立場でそれぞれ行動を起こしていくことが求められるでしょう。快適性や効率性だけでは捉えられない価値が、人を行動へと促すのではないのでしょうか。フューチャー・リビング・ラボは、その地域における新たな価値の創造と実現を、そこに住む人びとと共に探求していきます。

地域に暮らす人びと 未来と一緒に構想し かたちにする

ビジョンデザインで描いた価値を、さまざまな地域で、人びとの暮らしのなかで実践する活動をはじめています。

地域の新しい習慣や文化を生み出すクリエイティブな発想を支える新しい社会システムについて、地域の人びとの対話を重ねながら共につくりあげていく試みです。



わたしの野菜

都市と農地の間に位置する「郊外」。その地域がより暮らしやすくなるには、どのような仕組みが必要でしょうか。

東京都分寺市には、300年以上の農業の歴史があります。地元の農畜産物は「こくべじ」と呼ばれ、地域の飲食店で利用され親しまれています。私たちは、地域に暮らす人びとと、農家や飲食店のつながりがさらに近いものになる方法を、地域の行政や市民団体、飲食店の方々と意見を出し合うなかで考えました。

「わたしの野菜」と名付けた仕組みは、農家のつくった野菜を市民が選んで自ら地域の店に持参し、料理を食べることで、消費者であった市民が小さなつながり＝コミュニティをつくる役割を担うようになるという試みです。専用アプリで農家や飲食店の情報を得て、野菜や希望のメニュー

を出してくれる店を選ぶことができます。食事を楽しんだ市民は、その経験をSNSでシェアします。

2018年11月・12月に実施したイベント「わたしの野菜」は、参加した市民の方々から好評をいただきました。地域の方々と共に作りあげたイベントで、新しいかたちのコミュニティづくりの挑戦として今後のフューチャー・リビング・ラボ活動の端緒となりました。



Hi Miura Project

市民が「地域の活気や魅力」を感じるために、街にはどのようなしくみが必要か。わたしたちは、クリエイティブ・ディレクター藤原大氏とともに、神奈川県三浦市でこれからの農業に挑むひとりの経営者と出会い、生産者の地域に対する眼差しや野菜づくりへかける思いを知りました。そして、このような地域で活動される方の思いを地域で共有することが、新しい社会のしくみをつくる第一歩なのではないかと考えるようになりました。

そして2年間の活動の中で、野菜を「作る人の心」や「作った人との近さ」を感じて、この地域の素晴らしさや可能性について考えてもらうために、わたしたちは、野菜を作った人と買う人が交わす「思い」によって価格を変化させる不思議なしくみをつくりました。2019年11月から販売店でスター

トしたモデルを皮切りに、今後は三浦地域に関係される事業者、教育機関、自治体などの方々と共に、未来について考える活動を発展させていきたいと考えています。

便利なが優先され、多くの場面で人と人とのやりとりが効率化されていく時代に、手間をかけて小さな関わりをつくることの価値に着目し、より多くの人々や事業者が携わる新しい社会のしくみを創造することをめざし、これからも挑戦を続けていきます。



あとがき

ビジョンデザイン「vivid」活動開始(2010)

ビジョンデザインの活動が現在のかたちになるために、2016年に2つの大きなできごとがありました。

「Society 5.0」のイメージ

1つは、「Society 5.0」と少しばかりひねくれた出会いをしたことです。

Society 5.0が発信された頃、その内容に詳しい方に話を伺いに会いに行きました。そこで印象的だったのは、「Society 5.0はゼロサムではなくプラスサムの世界なんだ」と言われたことです。「どこかの国で工場の生産効率が上がると、その国に製品を送っていた別の国の工場で働いていた人の仕事がなくなるような世界ではなく、技術の進歩があったとき、両方の国の幸せをつくるのがSociety 5.0なんだよ」と教えてくれたのです。私たちは、「Society」という言葉に込められた思いが見えた気がしました。効率性や利便性ではなく、人びとの生活やひとりひとりの気持ちを大切にす社会をめざしているのだとわかったのです。

しかし、Society 5.0の発信が始まると、目にする情報はロボティクスやAIなどの先進的な技術が主役に描かれているものがほとんどだという印象を受けました。そこで、私たちが感じたSociety 5.0を具体的に描くのはデザインの役割であり、私たちがやることだと気付いたのです。そうして最初に生まれたのが「Energize our future communities」です。CO₂ 排出量を減らすという大きな社会の目標に対し、いかに効率的に節電するかではなく、街をマイクログリッドに変えることに関して、どうすれば住民の同意が得られるのかという人の視点に立った問題設定をして、人びとの地域コミュニティを活性化させたいというモチベーションにのせてそれを解決するというビジョンです。これをつくることで、将来志向の社会システムの在り方

ビジョンデザイン「vivid」活動開始(2010)

について、人の視点から問題提起をするというビジョンデザインの活動を続けていけそうだという感触を得ることができました。

「Society 5.0」のイメージ

もう1つのできごとは、街・ホームのビジョンをつくったことです。

このプロジェクトは、ある日立の経営幹部から「自動でカーテンが開くスマートホームのようなものではなく、社会に対して意見を述べるような将来像をつくりたい」と声がかかり、是非やらせてほしいと始めたものでした。この活動を始めるときにつけたプロジェクト名が「Beyond Smart」という言葉だったのです。この言葉を目標に、私たちは何度もシナリオを書き直し、6つのビジョンをつくりだしました。そしてこれらのビジョンをこの言葉とともに発信し、多くの方との対話を重ねるごとに、Beyond Smartは私たちにとって大切な考え方として定着し、ビジョンデザイン全体のコンセプトとなったのです。

「Society 5.0」のイメージ

私たちはいま、ビジョンで描いた価値を地域で実践することを進めています。地域の方々に対して「困っていることはありませんか」と聞くのでもなく、「これをやらせてほしい」と押しかけるのでもなく、私たちの実現したいBeyond Smartの世界を胸に、地域の方と向き合って、一緒にやれることを探しています。

地域コミュニティのビジョンは誰かが策定するものではありません。それは、コミュニティの中で形成されていくべきものだと考えます。地域の方がクリエイティビティを発揮して、新しい習慣や文化を生み出すとき、そこにおける日立の役割を見つけることが、私たちのゴールなのです。

Don’t just be smart, go beyond smart.

ビジョンデザイン「Beyond Smart」活動開始

2019年4月
ビジョンデザインプロジェクト

	日立製作所の活動	作成したビジョンなど
2010ー2015	<p>ビジョンデザイン「vivid」活動開始(2010)</p> <p>【受賞】 将来構想ツール「将来都市生活像を考えるための25のきざし」グッドデザイン賞(2013) 「Kizashi Method」Best Practitioner Award, ICServ 2014</p>	<p>25のきざし Mobilize the future Future healthcare</p>
2016	<p>「Future Business Scenario」活動開始</p> <p>【社外の動き】 内閣府 第5期科学技術基本計画(Society 5.0)策定 経済産業省「スマートモビリティシステム研究開発・実証事業(自動運転による新たな社会的価値及びその導入シナリオの研究)」実施</p>	<p>Energize our future communities Factories on demand</p> <p>自動運転車いす 医療機器搬送カート 生産システム連動物流カート 災害時の一斉避難誘導 水道の代替</p>
	<p>ビジョンデザイン「Beyond Smart」活動開始</p>	<p>Ageing with me Home appliances to ward off colds Humanizing public safety More household items within reach My meal pass to go! Educating kids with robots</p>
2017	<p>DistribuTECHにて「Energize our future communities」発表 CeBITにて「Illustrating our vision of the future that goes beyond smart」発表 CEATEC JAPANにて「超スマート社会の生活コンセプト」 「シニア向けコミュニケーションロボットコンセプト」発表 Innovation Roundtable® Summit 登壇</p>	<p>Communication through dynamic pricing デジタル社会のきざし Connecting services for household chores Morphing into a walkable city</p>
2018	<p>InnoTransにて「Fare fund」発表 フューチャー・リビング・ラボ活動開始</p>	<p>Fare fund Crisis 5.0 TRUST / 2030 ID for gig economy Cycle of change こくベジ「つれてって、たべる。わたしの野菜」</p>
	<p>【受賞】 「Vision Design Project」iF DESIGN AWARD 2018 将来社会のあり方を探索するデザイン活動「ビジョンデザインプロジェクト」グッドデザイン賞</p>	
2019	<p>Innovation Talk「FUTURE TRUST」開催 Hi Miura Project SHOP PEEKABOO実証実験開始 デジタル多摩シンポジウムin 国分寺 開催</p>	<p>Your reliable city 生産者と購買者の思いで変化する決済システム</p>
2020	<p>墨田区・向島橋銀座商店街におけるEmbedded Exhibition開催</p> <p>Hi Miura Project DESIGNART TOKYO 2020出展 デジタル多摩シンポジウム2020 開催 Hi Miura Project みらいのやさいプロジェクト 実証実験実施</p>	<p>持続可能な社会のきざし</p>
2021	<p>ビジョンデザインフォーラム2021 開催</p>	

「Vision Design」

発行日：2021年3月(第3版)

著 者：株式会社 日立製作所 研究開発グループ 東京社会イノベーション協創センタ ビジョンデザインプロジェクト

発行元：株式会社 日立製作所 研究開発グループ 東京社会イノベーション協創センタ

